



ちよびり変わった走り方をするディックに「やあ、ディック。おはよう、ディック」といった声が周囲からかかる。左は右半身が麻痺している、ブラジルから来た少女アンドレア・デメロー

康管理の大事さを気づかせた。昔うにサッカーやテニスのような球出来なくとも、歩いたり走ったり来るはず。間もなく、義足をつけ兜のようにびまんびまんと跳びは姿が、セントラル・パークに現れ「最初は街灯から街灯までの数十メートルを走るのがやっと」だった。そのうち1マイル、2マイルと走距離が延び、1年後にはセントラルパークの貯水池を周る5マイルマに参加出来るまでになった。76年、彼は最初のニューヨークマに参加した。

ゼッケンも付けず、走るとも跳もつかぬ格好で走る片足の走者に道を埋めた観衆は狂ったような拍手送った。途中で、義足と足との接から血が流れ出したが、観衆の声苦痛を忘れさせた。優勝者より5遅い7時間24分で、ディック・トムは42.195キロのマラソンを先走「ゴールに入った時、生きている、こういう事だったのかと思った」彼は言う。

新しいビジネスの方も順調に伸びた。数年の間に二十数人の従業員抱える会社に成長し、このまま進ニューヨークを代表する人材コンサルタント会社にまで成長するだろうわれた。成長期にあった会社は長時間を彼に強いたが、彼もそれえて寝食を忘れて働いた。

そんなある夜、ディック・トラは再び彼の人生を変える体験を夢を見たのだ。どこか大きなホーお祝いが行われていた。飾り立てたステージの上に自分が立っていた。誰かが大きなトロフィーを彼に差しした。彼がそれを受け取ると、会集まっていた群衆が拍手喝采した。その歓声が消えると、ステージの